薔薇の守護者

百合好き虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薔薇の守護者

【Ｎコード】
Ｎ３１９３Ｋ

【作者名】
百合好き虎太郎

【あらすじ】
警備会社『アイギス』に所属する新人エージェント、『シールド１１』水無月来夏…彼女は依頼で私立リリアン女学園に派遣される。狙われたリリアンに咲く薔薇達を護る事が出来るのか…来夏の任務が始まる。
「マリア様がみてる」と「恋する乙女と守護の楯」がクロスしています。

1話（前書き）

初投稿です。下手くそですが、楽しんでもらえると嬉しいです。
ガールズラブが苦手な人は気をつけて下さいね？

1話

「皆さんご覧下さい！！若き世界の歌姫、カリーナが来日いたしました！！空港では彼女を一目見ようと多くのファンが集まっています！！」

多くの人がごった返す空港、テレビのレポーターが多くのファンの声に負けまいと大きな声で実況している。

『…シールド１１、状況を報告しろ』

耳に装着した通信機から聞こえる男性の声…私の上司で所属する課の課長だ。

「こちらシールド１１（イレブン）。今のところ、異常ありません」

小声で通信に応える。

『油断はするな、常に神経を尖らせろ…シールド１１――今のお前は、文字通り“楯”なのだ。それを忘れるな』

「了解。…アイギスの名に懸けて」

『よし。通信終了、引き続き任務にあたれ』

その言葉の後、課長からの通信が切れる。

「……護ってみせるさ…この身に代えても…」

・

・
・
・
「カリーナが日本で行う初コンサートの為に来日しました！！あぁっ、押さないで下さい！カメラさんしっかりっ！！」
揉みくちゃにされるレポーターの背後で、その歌姫はにこやかに手を振っている。
「両脇を、がっちりとボディガードに挟まれていますっ！あの『予告状』を懸念しての事でしょうかっ」
レポーターの言う通り、歌姫カリーナの周囲を黒服の男達が囲んでいる。
「命を脅かす『予告状』が来ても尚、彼女はコンサートを取り止めませんでした！そして今もファン達に囲まれて、にこやかに笑顔を振りまき、握手とサインをしています。なんという度胸！なんという勇気！」
ファンサービスが旺盛なカリーナは、集まった多くのファンに向かい、花のような笑みを浮かべて優雅に手を振る。
握手を求められれば、極力応えようともする。ボディガード達は歌姫のファンサービスに焦りを隠せない様子で、慌ただしく動き回っている。
無理もない……彼女は今、命を狙われているのだから…
私は周囲を見渡し、怪しい動きをする者がいないか警戒する。

「ミス・カリーナ！ウェルカムトゥジャパーン！」
レポーターがカリーナにマイクを向ける。
「ハァイ！」
「おおおおおおぉぉぉぉぉぉぉー！！」
「うわ、凄い声っ！ファンの声で、私の声がスタジオに届いているか分かりませんが、とにかく凄い歓声ですー！！」
カリーナの返事に、ファン達が喜びの雄たけびを上げる。この空港を震わせている様な錯覚を覚える程のファンの声にレポーターが負けじと声を張り上げる。
「カリーナ！視聴者のファンにメッセージを！」
「日本の皆さんに会えて、うれしいデース♪ワタシのコンサートみんな聞きに来てクダサイネ♪」

事の発端は、数ヶ月前に遡る。
以前、カリーナと握手をしたファンの男が、自分達は相思相愛に違いないと勘違いし彼女に付き纏うようになった。
しつこく彼女の後を追い続けた男は通報され、警察に身柄を拘束された。
…だが、話には続きがあって…その後裁判にかけられた男に下された判決は、『カリーナの半径５ｋｍに近づいてはならない』というもの。
この判決に怒った男は、カリーナの命を狙い始めた。

何て傍迷惑な、自意識過剰男…そう呆れるが、こういう案件は少なくない。
以前にもアメリカの歌姫が、ほぼ同じ内容で命が狙われた事件があった。その事件を阻止したのは私の所属するアイギスの先輩エージェントで、その実績から今回もアイギスに依頼が入ったのだ。

しかし、その先輩エージェントは別件の任務に就いており、まだ新人でひよっ子とも言える私に任務が廻って来た。
１６歳の私はその外見から高校生にしか見えず、犯人の男の油断を誘い…そしてカリーナの傍でファンの振りをしてくっ付いていても警戒されづらい。

「カリーナさーんっ、サインをーっ、サインプリーズ！！」

ファンから次々と差し出される紙にサインするカリーナ…流れる様にサインを書いていく。

ふと彼女が足を止めた。視線は傍に付き、目立たぬ様周囲を警戒していた私。

「あら？クールなボーイ――くすっ、アナタもサインが欲しいの？」

「え？あ…いえ、私は…」

花の咲くような綺麗な笑顔をカリーナに向けられ、周囲に向けていた意識が彼女を向く。

「日本人、エンリョする、よくないデスヨ～子供はもっとオープンに甘えればイイデス。分かりましたかボーイ？」

「えっと…あははっ…ボーイって…」

カリーナの言葉に苦笑が漏れる、カリーナは動きやすいカジュアルでパンツルックな私を少年と勘違いしたようだ。

「何とも微笑ましい光景です。カリーナが少年にサインをしています」

「コンサート、よろしくデス♪ステディなガールフレンドと聞きに来てネ」

カリーナが茶目っけたっぷりの笑顔を私に向けてきた瞬間、背後の遠く離れたビルで―――何かがキラリと光った。

???side

「カ・カリー…ナ…、やめろ…やめてくれ……ボク以外の男に、微笑むのは止めろ…」

男は構えている狙撃銃のスコープ越しにカリーナを見ていた。

「ボクの…ボクだけのカリーナ…キミのその笑顔はボクだけのモノ…ボクだけに向けられていれば…いいんだ…」

血走った眼でカリーナを見つめる…銃のトリガーに指が掛る。

「今…キミを、天国に連れて行ってあげるよ…心配しないで…ボクもすぐ、キミのもとに行くからね…カリーナっ愛してるよっ！！」

男の顔に狂喜の笑みが浮かぶ…そしてそのトリガーを…引いた。

???side…end

2話

ビルの光を見た瞬間、感じた殺気…私はその感覚に従い、カリーナの背後に廻り…手に持っていた皮鞄を両手で掲げる。

「っ！！」

その瞬間、鞄に何かがぶち当たる衝撃…鞄に仕込まれた鉄板が放たれた銃弾を防いだのだ。

「きゃああっ！！」

カリーナが悲鳴を上げる。それまでの周りの歓声がピタリと止まる。

一瞬の静寂の後―――

「し…少年の鞄に、銃の弾が……！！」

突然の大きな音に、人々は本能で危機を感じ、悲鳴を上げながら散り出す。

「そ、狙撃だっ！！カリーナが狙われたっ！！」

「向かいのビルの6階だっ！！急げっすぐ捕らえるんだ！！」

ボディガード達が、カリーナの周囲に立ちはだかり『防弾の壁』となる。

通信機で連絡を取り、犯人の確保の指示を出す黒服のボディガード。

「Ｍ７００、ボルトアクションライフルか…」

失敗してもすぐに次の銃弾が発射されないという所から、使われている銃器に当たりをつける。

次の弾丸を装填し、今にもこちらを狙ってくる可能性が高い…私は更に周囲を警戒する。

「な、な…何者かが…カリーナを狙撃した模様ですっ」

集中し、少しの異常も見逃すまいと体に力を込める。その私の耳に気丈にもマイクを持ち、事を報道しようとするレポーターの声が入る。

「そ…それを、少年が…いきなり飛び出て…が、鞄で弾を受け止めました！信じられません…！信じられないっ！！」

「……少年じゃない」

私は呟く。

「え…？今、何か……？」

レポーターの耳には、正確には聞き取れなかったのか、聞き返してくる。

『シールド１１、こちら本部。狙撃手の無力化に成功した。…対象の安否を報告しろ』

通信機から聞こえる課長の声。

「こちらシールド１１。対象は無事です」

『良くやった。ミッションは終了だ、帰還しろ』

「了解――シールド１１、帰還します」

課長から出された帰還命令に、頷き返答する。

「た…助かったの？」

カリーナが私に歩み寄って来る。

「もう大丈夫ですよ、ミス・カリーナ。犯人は押さえましたので、もう安心です」

安心させる為に、笑顔でカリーナに答える。

「アナタ…ファンのボーイじゃない？」

不思議そうな表情で私を見るカリーナに苦笑する。

「貴女が依頼した『アイギス』のガーディアンです」

私の答えに、驚くカリーナ。

「まさか…アナタのようなボーイが、『アイギス』のガーディアンなんて…」

「ボーイって…これでも…女なんですけどね…」

いまだに少年と勘違いされている事に、肩が自然と落ちてしまう。パチクリと瞬きをして、カリーナは私を見つめる。ボディガードの男達も信じられない、といった表情を浮かべている…その信じられないという表情は、私がアイギスのガーディアンという事にか、それとも女だという事になのか…判断がつかない…。

……泣くぞ私？

「ありがとう」

浮かんできそうになる涙を堪えていると、カリーナは感謝の言葉をくれる。

「いえ」

「アナタ方がいて良かった」

「…任務ですから」

カリーナは満面の笑顔で感謝してくれている。少し照れた私は頬を掻く。

「フフ、シャイなのね…カワイイ♪」

「うぅ…頬を突かないで下さい」

すぐ近くまで近づいたカリーナは、私の熱くなった頬を人指し指で突いてくる。

「ワタシ…すごくドキドキしちゃった」

「……え？えぇ！？」

カリーナは人指し指を引っ込めると、いきなり私に抱き付いてくる。

「アナタがいれば、怖いモノなんてないわねっ♪」

「あのっ…任務中なんですけど…それ以前に私は女で…えーと、何で顔を近づけてくるんですかっ？！」

カリーナの頬は、微かに赤く染まり…少しずつ顔が近付いてくる？

「あら、もう安全なんでしょ？」

「それは…そうですけどっ…顔を近付けてくる理由にはならない…っ！？」

近付いてくるカリーナの顔、だからといって強引に突き放す事も出来ず。

「うふふ、本当にありがとうね」

「ちゅ～～☆」

「んぐっぅうう～！？」

そう言って…私の唇に、カリーナの唇が…強く押し当てられたのだった。

（……ファーストキスの相手が女性で…ディープキスって…どう

なのよ？）

口の中で踊るカリーナの舌を感じながら、私は遠い目で彼方を見る事しか出来なかった。

3話

「だーっはっはっはっは！何度見ても笑える～！」

目の前でバカ笑いする、グラサン髭親父…このオッサンが私の上司である課長。

「…そんなに楽しいですか…私の唇が奪われた事が…」

「だぁって、これシールド１１の初ｋｉｓｓでしょ？し・か・も・これ舌入ってるよね～あぁ…シールド１１が大人の階段を登っちゃった…ぷぷっ」

「…絞める…このオッサンの首…絞めてやる…」

マジ楽しそうに笑う課長に、暗い感情が芽生える。

「落ち着くんだっ来夏！！」

そう言って私を羽交い絞めにして抑える男性…先輩エージェントである如月修史。彼は小柄で、身長が１６８ｃｍの私より低い…その低い位置にある顔を振り返り私は叫ぶ。

「離して下さい先輩！！いっぺんキュってしてやんないと気が済まないっ！！」

「だからっそんな反応が課長を楽しませてるんだって！！だから落ち着けよっ」

「くうぅぅぅ…」

悔しさからギリギリと歯軋りしながらも、体から力を抜くと先輩も解放してくれる。

「ふぅー…さて、シールド１１…いや、来夏君ご苦労だったな。クライアントも君の活躍には満足していたぞ。アイギスの名に恥じない、素晴らしい働きだった」

一通り笑って満足したのか、課長が真面目な口調になる。

「…ありがとうございます」

課長からのお褒めの言葉に、頭を下げる。

「本当よく頑張ったな来夏。いい手際だったよ」

先輩も笑顔で褒めてくれる。

「そう言ってもらえると、自信が付きます…ありがとうございます先輩」

先輩はまだ２４と若い年齢ながら、このアイギスで活躍する凄腕のエージェントだ…なので素直に嬉しい。

「しっかし…あの映像を見ていたら、凄いデジャブが…」

そう呟く先輩…それを聞いた課長がニヤリと口元を釣り上げる。

「まるで三年前の任務の再現みたいだったもんね～修ぅちゃん」

「ぐぅっ…思い出させないで下さい課長！！」

呻く先輩…そう、過去にあったアメリカの歌姫が来日した時に護衛したのは先輩だったのだ。
しかも、そのクライアントである歌姫にお礼のキスをされ…鼻血を噴き出しぶっ倒れたそうだ…鼻血や倒れた事以外は今回の任務と内容が類似している。

「その点、来夏君はその後の対応が冷静だったよね～任務は本部に帰るまで任務ですってね」

「遠足は家に帰るまでが遠足です…みたいなノリで言わないで下さいよ課長。…正直此処に帰って来るまでの記憶が曖昧です…」

真っ白になった意識、しかし体は機械的に本部へと帰還していたのだ…そう言って私は頭を抱えた。

ここアイギスは、一般家庭から一流企業まで、幅広く警備を行っている、そこそこ有名な警備会社だ。
それは、あくまで表向きは……だが。
至極普通の警備会社を営む一方で、アイギスは別の顔を持っている。
警察を信用出来ない、特殊な要人の護衛を請け負い……場合によっては、銃器の装備も行う事もある、非合法の『護り屋』としての裏の顔……それが、アイギス。
その１セクションである特殊要人護衛課が、此処なのだ。

仕事の内容が内容だけに、此処には様々な経歴を持つ者が集まって

来る。
互いに過去は詮索しない…それがルール…
「ちなみにさっきの活躍映像は、ライちゃんの成長記録Ｖｏｌ．１８２に保存した。後でコピーしたのを草薙翁にお渡ししておくね♪」
「止めて下さいっ！！爺ちゃんに渡したら、家族皆が見ちゃうじゃないですかっ！！」
「勿論っ、ご家族の皆さんにもライちゃんの成長を見てもらわないといけないもん…大人の階段を登ったライちゃんの姿をね♪」
しかし、私の身元はこのアイギス内で…課長や先輩、この部署では殆どの人が私の経歴を知っている。
私…草薙　来夏は、アイギスには祖父の旧姓である水無月　来夏の名で所属している。
その祖父は、アイギス創設期に活躍したエージェントで…現在アイギスの幹部となっている。
幼い頃から、その祖父から訓練を受け…現在、この特殊要人護衛課に所属するに至ったのだ。
私がアイギスで働いている事は家族皆が承知していて、この課長は事あるごとに成長記録だと言って映像を家族に流している。
中には見られたくない失敗映像なんかも渡されたりして、私は切実に止めて欲しいと願っている。
「あのキスシーンの削除を求めますっ！！」
「イ・ヤ♪」

「うがー！！やっぱ絞めるっこのオッサン絞める！！」

再び飛び出そうとする私、その肩に先輩が手を置く。

「来夏…課長には何やっても無理なんだ…この人の、人の不幸を喜ぶ趣味は死んでも治らないさ…」

何処か疲れた口調で、先輩は言う。いつも課長のその趣味の被害にあっている先輩の言葉に、私の怒りは鎮まり…思わず同情の視線を先輩に向けた。

「先輩…強く生きて下さい」

「あぁ…来夏もな…」

二人、諦めの表情で頷き合う。

「もぅ～修ちゃんもライちゃんも酷い～」

拗ねたような口調で、口を尖らせ言う課長…いい年したオッサンがそんな仕草しても可愛くないわっ！！

「「酷いのはどっちだーっ！！」」

私達は声を揃え、課長にツッコミを入れた。

4話（前書き）

所々オリジナルな設定で書いているので、ツッコミ所満載かもしれませんが…生温かい目で見てくれると…嬉しいです。

4話

「おふざけはここまでにしよう。仕事の話だ」

課長の緩んでいた表情が引き締まる。

「次の任務…ですか？」

ピリっとした緊張感、思考が自動的に仕事モードに入る。

「そうだ。来夏君にしか出来ない、特殊な任務だ」

その言葉に、少し胸が高鳴る…。

まだまだ新米、ひよっこ、半人前と呼ばれ…自分でも未熟だと自覚している。しかし、私にしか出来ないという言葉に、緊張で溜まった唾液を呑み込む。

「やってくれるか？」

「…やります。未熟なこの身でありますが…アイギスの楯として、全力で」

課長は私の返事を聞いて、嬉しそうに頷いた。

「では、任務の説明をしておこう」

「はい」

・

・

・
課長から説明された任務を要約すると。
東京都下にある学校、私立リリアン女学園…明治３４年に創立されたその学園は、もとは華族令嬢の為に作られた。
創立されて長い年月が経つ現在でも、資産家や旧家のお嬢様達が通う伝統あるカトリック系お嬢様学校である。

今回の任務は、そのお嬢様学校の学園長からの依頼だそうだ。
内容は…一枚の手紙が送られてきた事が発端―――多くのお嬢様が通うリリアン女学園の、一部の生徒を狙うという悪質な犯行声明文だった。

ただの悪戯だと流す事は、大切な子供達を預かる立場の学園長には出来ず、個人的にアイギスに依頼を持ち込んだそうだ。

「今回の任務は、エージェントが学校内部…その狙われている生徒達の近くで護衛を行うといったものだ。よって、来夏君には私立リリアン女学園の高等部に生徒として潜入してもらう」

「潜入…任務」

「そうだ。今現在、アイギスには来夏君以外に適任者はいない…流石に、もう修史を女学園に潜入させる事も出来んし、少ない女性エージェントであるシールド１０は別任務に就いていて呼び戻す事は不可能だ」

もう…というのは、過去に先輩が任務で女子高に潜入した事があったのだ…女装して。
小柄で童顔…そして可愛い顔…当時、既に成人していた先輩だが、その容姿から女装しても問題無く任務を遂行したという経歴があっ

た。
しかし、それも既に3年前の事で２０代半ばに差し掛かった先輩には不適任と言えるかもしれない。
ここ特殊要人護衛課に所属する女性エージェントは、私を含め３人…女性エージェントであるシールド４は年齢的に生徒としての潜入は無理、シールド１０は不在…よって新人である私に任務が廻って来たのだろう。

「今までの過酷な訓練、そしてこなしてきた任務での実績から君にこの任務を下す。初めての単独任務となるが、勿論我々も万全なサポートは行う…やれるか？」

目が窺えない、色の濃いサングラスの下から見定める様な課長の視線を感じる。

初めての単独任務…しかも潜入…、今回のカリーナ護衛任務だって、実は私の他にも数名アイギスの護衛が付いていた。
決して私が単独で護りきったワケではない。

不安が無いと言ったら、嘘になる…しかし、私は此処で立ち止まる訳にはいかない。
己の夢の為、そして何より…理不尽にも命が狙われる人達を護るために…

「やります、護ってみせます！」

強く、サングラス越しの課長の目を見つめて宣言する。

「ふっ…いい目だ！頼んだぞ来夏君、いや…『シールド１１』！！」

「了解！！シールド１１、リリアン女学園の潜入任務に就きます」

ニッと笑う課長、コールサインで呼ばれた私は背筋を伸ばし強く頷いたのっだった。

・

・

・

・

その後は詳細な情報を課長から受け取った。

「私立リリアン女学園と言えば、幼稚舎から大学までの一環教育が受けられる有名なお嬢様校…１８年通い続ければ純粋培養お嬢様が箱入りで出荷される、という仕組みが残っている学校だ。…『ごきげんよう』が挨拶だったりするんだよね～♪」

「うわぁ…堅っ苦しそう…」

楽しそうに言う課長に、私は苦笑を返す。

「むふ、スカートのプリーツは乱さないように、セーラーカラーは翻せないように歩くのがリリアンでのたしなみだそうだ。…お嬢様なライちゃん…楽しみだなぁ♪」

「はぁ…人間はそんなすぐに変わったりしませんよ」

幼い頃からの、戦闘訓練…勉強なども普通の学校ではなく、アイギス内で教育を受けている私は普通の学校に―――しかもお嬢様学校に…仕事とはいえ、通うのは初めてだ。

「変わるさ、だって～前例がある訳だし？修ちゃんなんて男なのに、

女装して女子高に馴染んでたもんね」

「可愛かったんだ～修ちゃんw」とクネクネしている課長を軽く無視して、渡された資料を読む。

（護衛対象は…三人…か）

リリアンの生徒会、通称山百合会…普通の学校では生徒会長・副会長・書記・会計であるが、この役職・役割を山百合会では三人で同等に分担して受け持っているそうで、紅薔薇　水野蓉子、黄薔薇　鳥居江利子、白薔薇　佐藤聖…送られてきた犯行声明文で狙うと仄めかされている三人がそのメンバーだ。

リリアンの高等部には『姉妹（スール）』という変わったシステムが存在し、ロザリオを先輩から渡されると、その生徒はその先輩の『妹』となって先輩『姉』から色々な指導を受けるようになるそうで、三年生である三人にもその『妹』がいて、鳥居江利子の『妹』にも『妹』がいる。

…ややこしいな…、まぁそれは置いておいて、山百合会を形成するメンバーはこの七人。

メインのこの三人の護衛＋『妹』達の周囲も警戒が必要そうだ。

（これだけの人数を私一人で…大変な任務になるだろうな）

本部からのサポートがある、と言っても過酷な任務になりそうだ。

私は表情を引き締め、気合いを入れる。

意識が過去にトリップしていた課長が戻って来たようで、再び口を開く。

「基本、護衛は学校内部で行ってもらう。護衛対象は生徒会員として遅くまで学校に残っていることもあるから…そこらへんは学園長が何とか彼女達の傍にいてもおかしくない立場を用意してくれるそうだ」

遠くからの護衛では、万が一の場合遅れを取る可能性がある…近くで護衛出来るのは有り難い。

「了解」

「来夏、これ」

先輩に名前を呼ばれて、先輩のいる方を向く。先輩は、私と課長が話している最中にこの場を一度離れて、今戻ってきた所。その先輩の手は、セーラー服…おそらくリリアンの制服だろうソレを持っていた。

「これがリリアンの制服ですか…うわっ、スカートが長い」

今時の流行りの制服とは違い、時代を逆行しているかのような制服だった。

「ん～…、ライちゃんはセーラー服よりブレザーの方が似合うかもねー」

体に当て、スカートの長さに驚いていると、それを見た課長が感想を言ってくる。

「…それは、つまり似合って無いと言いたいんですか？」

「あー…来夏は、可愛いっていうより凛々しいって言葉の方が似合うもんな…でもそれも良いじゃないかっ」

「…もういいです。フォローはもういりません…私より女らしい顔をした先輩に慰められると…余計惨めですよ」

自分でも、こういうのは似合わないって知っているから…私は肩を落とした。

私は下がったテンションのまま、任務に就く準備をする為にその場を後にしたのだった。

4話（後書き）

これで漸くオープニングに当たる場面が終了です。ここまで読んで下さった方々に感謝です。

5話（前書き）

小説書くのって難しいですね…思うように話が進まない…ｏｒｚ

5話

早朝六時…私立リリアン女学園の制服に身を包んだ私は、その学園の校門前に立っていた。
早い時間にも関わらず、門は開かれている。
護衛者(ガーディアン)としての目で、外部からの進入口となる校門を見る。門の前には守衛の詰め所があり、外部の人間が入らないように見張っている。
早朝だからか、パッと見…現在守衛は一人しかいないようだ。

（一人か…これは少し問題かも…）

一人で監視する、というのは結構穴が出来る。門を監視するなら複数が望ましい。朝、監視が薄い間に侵入して潜まれる…何て事もあり得るからだ。
監視カメラも複数設置されてはいるが、死角なんて何処にでもある。
この件は、学園長に会ってから直接進言するとしよう。

とりあえず、いつまでも此処に立っていて学園長との約束の時間に遅れてはいけない。
私は、リリアン女学園の門をくぐった。

頭に叩き込んだ、リリアン内部の情報に従い敷地内を進む。
舗装された銀杏並木を通り、マリア様像の前を通り過ぎる。古い校舎は、リリアンの長い歴史を感じさせるものだ。
生徒用の下駄箱、用意され自分用の上履きに履き替え…学園長の待

つ学園長室へ。
一目で分かる、他の部屋とは違うタイプの木の扉。プレートには『学園長室』の文字。
多少の緊張を、一つ息を吐き追い出し…それから、右手でその扉をノックした。

「どうぞ」

部屋の中から聞こえる、女性の声。

「失礼します」

一言断り、その扉を私は開いた。
そこには老齢の、修道服に身を包んだ女性…学園長が迎えてくれた。

「子羊たちの学舎、リリアン女学園へようこそいらっしゃいました。わたくしがリリアン女学園の学園長、上村佐織です」

穏やかな口調に、優しい眼差しで私を歓迎してくれている。

「はっ！本日よりリリアン女学園に着任する、アイギス特殊要人護衛課の、水無月来夏です！」

背筋を伸ばし、自己紹介をする。

「はい、水無月さん。わたくし達は貴女が来るのを心待ちにしておりました。」

穏やかな微笑みで、私を見ている。

「長期の、実質一人での護衛は苦労も多いでしょうが、出来る限りの協力はさせて頂くつもりです。貴女には常に万全の状態でいてもらわなくては困りますからね」

「はっ！ありがとうございます。期待に応えられるよう、粉骨砕身で任務にあたりたいと思います！」

「お願いしますね。それで、まず貴女には二年生に編入して頂く事にしました」

編入する学年が二年と聞いて、私は自然と顔をしかめてしまう。

「二年生…にですか？護衛対象が三年生なので、出来れば三年生に編入させて頂けると有り難いのですが…」

「えぇ…それはわかっているのですが、空きがあるのは二年生だけでして…どうか了承して貰えませんか？」

「それはもちろん。私達は与えられた環境の中、最善の手を尽くして護衛対象を護るのが仕事ですから」

学園長にも、どうしようもない事は存在するのだ…前言の通りに、私は持っている能力を最大限に発揮して任務を遂行するのみ。

「ありがとう来夏さん。それで、貴女の編入するクラス…二年松組には護衛対象となっている紅薔薇…水野蓉子さんの『妹』である小笠原祥子さんが所属しているの。彼女も山百合会に出入りしている生徒ですから、仲良くなれれば護衛には色々と都合がいいでしょう。後は山百合会に出入りするのに、私から話を通しますので放課後に

もう一度此処に来て下さい」

「お心遣い、感謝します。よろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ生徒達の護衛を、よろしく頼みますね」

私は、学園長を見つめ頷く。

「お任せ下さい。アイギスの護衛（ガーディアン）として全力を尽くします」

「えぇ、頼りにしておりますよ来夏さん」

それから先程、気になった事を学園長に伝え細かい打ち合わせをする。

「…大体こんな所でしょう。では…始業までまだ時間がありますね…」

今の時間は七時十五分。学校が始まるまで、三十分以上ある。

「そうですね。始まるまで、学校内を見て回ろうかと思います」

「わかりました。では八時に職員室に行って下さい。松組の担任は月野先生ですので、職員室で聞いてくださいね」

「わかりました。では失礼しました」

それから、学園長室を辞した。

学園長室を出ると、私は頭の中に入っている敷地内の地図と照らし合わせながら学園内を歩いて回る。
今歩いているのは一年生の教室のある廊下。視線を窓に向けると見えるお聖堂、ガラス張りの温室が見える。
視線を廊下に戻し、見渡してみると、意外と死角がある…これは一度、きちんと調べる必要がありそうだ。学園内の間取りから敵の侵入、逃走経路を想定。
さらに、盗聴器の類が仕掛けられていそうな場所や、いざという時の脱出方法を考える。

考えながら学園内を歩いていると、次第に生徒が登校してきて学園内に活気が出てくる。
擦れ違うリリアンの生徒達を見ながら、下駄箱に向かい歩き出す。

（確か…山百合会が活動している場所は校舎外にあったな…一度確認しておこう）

私は上履きを履き替え、山百合会の本部…薔薇の館と呼ばれている建物に向かった。

6話

校舎を出て、中庭を少し歩くとその建物が見えてきた。木造の二階建ての古い洋館…此処が山百合会の本部…

（人気の少ない、今の内に周囲を見てみるかな？）

そう思い、足を進めようとした…が、ふと感じた人の気配に私の動きは止まる。

「ごきげんよう、薔薇の館に何か御用？」

背後から掛る、女性の声。私は不自然にならない様に、その声のする方を振り返る。

此処、リリアンでは課長が言っていたように挨拶は殆ど『ごきげんよう』だそうだ。

朝の挨拶も、別れの挨拶も、挨拶はこの『ごきげんよう』で済むとか…便利なんだか、どうなんだか…

「っ…ごきげんよう、いいえそういう訳ではないです」

目に飛び込んできたのは、髪をヘアバンドで上げている女生徒。

（護衛対象…鳥居江利子）

その姿は、資料に添付されていた写真で見た人だった。思わぬ遭遇に少し言葉が詰まるが、何とか挨拶を返す。

そんな私を、何を思ったのかジィっと見てくる鳥居さん。

「あの…何か？」

「ああ、いいえ…貴女、一年生かしら？全ての学園生を知っている訳じゃないけど、貴女程の特徴的な子がいたかしら？」

鳥居さんの言葉に少し驚き、私は目を見開く。

「特徴的…ですか？いや、私は一年ではなく二年なんですが…今日、このリリアン女学園に編入してきましたので、知らなくて当たり前ですよ」

今度は鳥居さんが、驚いたのか目を見開いた。

「あら、そうだったの？貴女って優秀なのね。リリアンに途中編入するなんて、余程の学力がなければ難しいのに…興味深いわ…」

此処リリアンは幼稚舎から大学までエスカレーター式で進学出来る学園だから、その分外部からの入学はハードルが高くなっている。編入に関してもソレは変わらない…彼女はそれを言っているのだろう。

「え…？」

「いえ、何でもないわ」

最後の方の言葉が小声で、聞き取れなかったが…鳥居さんは笑顔でさらりと流してしまう。

「はぁ…？それで、私ってそんなに特徴的ですかね？」

二コリと楽しそうに笑顔を浮かべる鳥居さん。

「えぇ♪その高い身長と、何より…身に纏う雰囲気、目の力強さかしら？此処リリアンでは中々いないタイプだと思うわ。私は面白いものを探すのが趣味だから、人を結構見てるのよ、だからこの見立ては間違いじゃないと思うわ」

首を傾げ、「どうかしら？」何て聞いてくる彼女に、どう答えろと？

「どうと言われても、何とも答えようがありませんね。…ただ私には、目指す夢があって…そこに到達する為に生きていますから」

…私は何でこんな話をしているんだ？ふと疑問に思ったが

「そう…貴女の目の強さの理由は、夢を追っているからなのね…羨ましいわ」

本当に羨ましそうな鳥居さんの表情に、口を開く。

「貴女には、そういう追いたいモノは無いんですか？」

「無いわ…毎日が退屈で退屈で仕方なかった。…でも、興味があるモノが出来たかも」

二コリ…いやニヤリか？鳥居さんが笑顔を浮かべて私を見た瞬間、何だかゾワリと背筋に悪寒が走った…何故にっ！？

ここから逃げたい衝動に駆られた私だが、護衛対象を放って行く訳にはいかない。

私は、腕に巻いた腕時計を見て八時近い事を確認した。

「そろそろ私は職員室に行かなくちゃいけないので行きますけど、えーっと…」

名前をまだ聞いていなかった事を思い出し、口ごもる。

「私は三年の鳥居江利子。リリアンでは上級生の事を名前にさま付けで呼ぶのよ」

「そうですか、じゃあ江利子さま…私の名前は水無月来夏と言います。それで江利子さまはまだ此処にいますか？」

自己紹介してくれた江利子さん…いや、江利子さまに名前を名乗ってから聞く。

「いいえ、もういいわ。楽しそうな物を探しに来ただけだし…大きな収穫もあったし…。職員室まで来夏ちゃんを送るわ」

ニコニコ笑顔の江利子さま…一緒に校舎に戻ってくれるのは嬉しいんだけど…、何だか獲物を狙っているかの様な江利子さまの笑顔が怖い。

「あは・はは…そ、そうですか。ありがとうございます」

「さぁ行きましょう」と私を促し、歩き出した江利子さまに私は続いたのだった。

・・・・

江利子ｓｉｄｅ

変わり映えのない毎日。退屈で退屈で、変化を求めて学園内をふらつく。

「ごきげんよう黄薔薇さま」

「ごきげんよう」

会う生徒達から、挨拶されて返していく。何ら変わらない日常…そんなもの飽き飽きしている。
私は人気の無い方に足を向け歩いて行く。無意識のまま歩いていると、いつの間にか薔薇の館の方に来てしまったようだ。
薔薇の館に目をやると、一人の見慣れない生徒…一瞬、その遠目でも分かる長身から妹の令かと思ったけど…令より髪が長い。

薔薇の館を見ているようだけど、何か用かしら？

「ごきげんよう、薔薇の館に何か御用かしら？」

背をこちらに向けている彼女に声を掛ける。私の声に反応して、ゆっくりこちらを振り向く彼女。
振り向く時に、気になったのは彼女の目…少し長い前髪が揺れ、その下から見えた目は『力強さ』を感じさせる。
決して目付が悪いとか、そういうのではない…何故だか、そう思ったのだ。

聞いてみれば、彼女は二年生への編入生だという。リリアンに馴染んでいない彼女の空気が何処か新鮮で、どんどん彼女への興味が出

てくるのだ。

夢を追いかけている。そう言う彼女…そう言った時の彼女の目は、殆どが前髪によって隠されていたが、更に強くなったのを感じた。どんな夢を追っているかは、私には分からないけれど…そんな彼女を、私は凄く羨ましく思えたのだった。

私を退屈から解放してくれるかもしれない彼女…水無月来夏ちゃん。どうにか傍に置く事は出来ないだろうか？…少し後ろを歩く来夏ちゃんを職員室に案内しながら、私はそんな事を考えていた。

7話

あの後江利子さまに職員室まで案内してもらい、そこで江利子さまとは別れた。

「ふふ♪ごきげんよう来夏ちゃん、また会いましょう」

そう言って去って行く江利子さまに、理解不能な一抹の不安を感じ私は首を捻ったのだった。

そうこうしている間に八時になり、私は職員室で担任の月野先生に会って軽くクラスの説明を受けてから教室に案内された。

二年松組…此処が私の編入するクラス。少し緊張しながら、先生の後に続き教室に入る。

途端に、クラス中の視線が私に注がれる。

（うっ…何だか圧倒されるなぁ…）

大人数の好奇の視線に晒され、少し仰け反ってしまう。

小さい頃からアイギスで教育を受けた私は、普通の学校に通った事が無い。しかもアイギスの職種から私の周囲には女の子よりも男の子の方が多くいた為、こんな女子ばかりの環境には慣れていないのだ。

「はーい、今日からこのクラスに編入する、皆さんのお友達を紹介

しまーす。彼女の名前は水無月来夏さん。東京には不慣れなそうなので、困っていたら助けてあげて下さいね」

先生から紹介される。私の設定は、父親の転勤で地方から引っ越ししてきた田舎娘…らしい…。

「それでは水無月さん、皆さんにご挨拶して下さい～」

「は、はい…初めまして、水無月来夏です。父の転勤で地方から引っ越ししてきました。趣味は刺繍、宝物は家族です」

刺繍は、刺繍と裁縫の腕がプロ級な先輩（プロのデザイナーに評価された事があるそうだ）に指導を受けて、私もそれなりの腕を持っている。

「何も知らない田舎者ですが、よろしくお願いします」

そう言って私が頭を下げると、クラスの生徒達は笑顔で拍手してくれた。

頭を上げて、一度クラス全体を見渡すと、後ろの席の方に資料にあった写真の人物が目に入る。

小笠原祥子…紅薔薇である水野蓉子の『妹』。

艶のある真っ直ぐで流れる様な黒髪の美人で、小笠原グループの一人娘という生まれながらのお嬢さま…読んだ資料にはそう書かれていた。

家柄から、彼女はこの件とは別に狙われる可能性もあるだろう。

「では、水無月さんは空いている席に座って下さいね」

「はい」

空いている席は…窓側の一番後ろ、小笠原祥子の隣だった。

鞄を置いて席に着くと、隣の席の小笠原さんが会釈してくる。
私も彼女に会釈を返す。

「よろしくお願いします」

「ええ、私は小笠原祥子です。こちらこそよろしく来夏さん」

祥子さんは少し堅い様に感じたが、微かな笑顔で自己紹介してくれた。

・
・
・
・
・

「うぅ…疲れた…」

一日の授業が終わり、放課後。此処に来るまでが凄く長く感じた。
授業の内容は、アイギスで教育を受けていたので問題は無かったが…問題があったのは、クラスメイトとなった少女達である。
休み時間毎に、群がる少女達。…お嬢様だからか、けっして姦しいとかそんなのではないが、編入生が珍しいからと質問の嵐である。

「お疲れ様、来夏さん」

ぐったりと、椅子に腰かけている私に声を掛けてくれるのは祥子さんだ。

「あぁ…祥子さん、今日はありがとう…本当助かったよ」

「いえ…流石にあれは、止めずにはいられなかったわ」

祥子さんは、捌ききれない質問の嵐で私がてんやわんやになっている所に、割って入ってくれた…私の救いの女神だ。

昼食も一緒に摂ってくれて、風除けとなってくれた。その為、少しではあるが祥子さんと打ち解けて、気軽に話せる様になっていた。

「クラスの子達もある程度満足しただろうし、明日からはこんな事も少なくなると思うわ」

「だといいんだけど…はぁ、女子高を甘く見てたよ…」

苦笑気味に祥子さんが言ってくれるが、まだまだ気は抜けない。今もクラスメイトが三人連れだってこちらに近付いてきている。

「来夏さん、良ければ私達と一緒に帰りませんか？」

そう言って、誘ってくる。

「あー…ごめんなさい、お誘いは嬉しいのですが、これから編入した件で学園長に呼ばれているので…また今度誘って下れますか？」

「そうなのですか…残念です。ではまた誘いますわね、ごきげんよう」

「はい、ごきげんよう」

学園長の呼び出しを理由に断ると、彼女達は帰って行った。
私は机の横に掛けていた鞄を手に取り、椅子から立ち上がる。
「ふう～…さてそろそろ行かないと、祥子さんごきげんよう」

「ええ、ごきげんよう」

祥子さんも鞄を手に持っている…これから薔薇の館に行くのだろうか？行き先が違う私達は、教室で別れた。

・
・
・
・

再び、学園長室。
ノックをして、返事を聞いて入室する。

「良く来てくれました、来夏さん」

「遅くなってしまい、すみません」

学園長室には、学園長ともう一人の人物…資料で見た護衛対象である紅薔薇、水野蓉子さまがいた。私は待たせてしまった事に謝罪し、頭を下げる。

「大丈夫ですよ来夏さん。来夏さん、こちらは山百合会で紅薔薇を務めている水野蓉子さんです」

学園長が、紹介してくれる。

「紅薔薇の水野蓉子です。リリアンにようこそ水無月来夏さん」

蓉子さまは大人っぽい、落ち着いた微笑みで歓迎の言葉を掛けてくれる。

「水無月来夏です。ありがとうございます蓉子さま」

名前を名乗り、頭を下げる。

とりあえず、挨拶が終わり…学園長が口を開く。

「蓉子さんには軽く説明しましたが、もう一度説明したいと思います。…来夏さんは二年生の途中編入です。そしてリリアンには長い伝統に培われた独自の学園文化があり、編入生である来夏さんがすぐにリリアンに馴染むのは難しいかと思います。なので現在、通常フルメンバーでは九名での山百合会運営を、三薔薇の三人、その妹である蕾三人に蕾の妹が一人…七人と人数が少ないという現状で二学期に入り学園祭が近い今、来夏さんを学園に慣れる為の一環として、山百合会のお手伝いに推薦したいと思います」

そう言って、学園長は私と蓉子さまを見る。

視線を蓉子さまに向けると、彼女は学園長の言葉を吟味しているのか思案顔だ。

「確かに現在、私と白薔薇には蕾の妹がいない状態ですので、人員が増える事に異存はございません。でも…来夏さんはそれでよろしいの？」

前言は学園長に向けた言葉。そして視線を私に向け、問いかけてくる蓉子さま。

「はい。薔薇さま方にご迷惑を掛ける事になるかもしれないですが、リリアンに不慣れな私を指導して頂けると有り難く思います。その

中で皆さんのお手伝いとしてお役に立てるように頑張りたいと思います…どうかよろしくお願い致します」

この場を設けてくれた学園長を裏切らぬ様、言葉を選び話して蓉子さまに頭を下げる。どうだろう？受け入れてくれるか…緊張する。

「来夏さん、わかりました。大変だと思うけれどよろしくね。学園長、来夏さんの事は私共にお任せ下さい」

頭を上げて蓉子さまを見ると、そこには綺麗な笑顔があった。了承してくれた事に内心、ホッとする…これで、護衛対象の傍にいてもおかしくない立場を私は手に入れたのだった。

7話（後書き）

少し苦しかったかな？（汗）…文章を考える才能が無い自分が憎い…ｏｒｚ

8話

学園長との話も終わり、今私は蓉子さまと連れだって薔薇の館に向かっている。山百合会のメンバーと顔合わせする為だ。

「…白薔薇さまの妹さんは、一年生なんですね」

「ええ、それも最近姉妹（スール）になったばかりなのよ。まぁ姉妹になる以前から、お手伝いをしに来てくれていたから、仕事にはそれなりに慣れているけどね」

道中、蓉子さまから薔薇の館の内情を教えてもらっていた。
ある程度は、学園長から提供された資料を読んでいるので知っているが、本人達から齎（もたら）される情報は貴重だ。

「なるほど…一年生が蕾ということは、今年度・来年度の山百合会のメンバーは例年より一人少ない状態が続くということですね」

「そうね。加えて黄薔薇の蕾は剣道部に所属しているから、そちらにも参加しなければならないし…彼女の妹は少し体が弱くて、無理はさせられないの。それに…私の妹にはまだ妹がいないし…このままの人数では心許なくて、学園祭の為に誰かお手伝いを頼まなければいけないところだったの」

「渡りに船だったわ」そう言って笑う蓉子さま。本当に困っていたのか、その笑顔は明るく感じた。

「期待に添えるよう、頑張りますよ」

生徒会とはいえ、一組織を運営するのは大変な事だろう。
蓉子さまのその笑顔を見て…私の仕事は彼女達の護衛だけど、出来る限り協力して、負担を軽くしたいと思ったのだった。

「ええ、期待しているわ来夏ちゃん」

そんな話をして歩いていると、薔薇の館に到着した。

朝も来たが、遂に薔薇の館内部に足を踏み入れる。その内部は、外見同様長い歴史を経ているのがわかるモノ…しかし古さは感じても、汚さは無い。館に出入りする人間が小まめに掃除を行って、大事に使われている証拠なのだろう。

「此処の二階が私達の執務室よ。一階には物置があるの」

そう言って、蓉子さまは階段を上り始める。その後を私は付いて行く。
階段が踏みしめるたびにギシギシと軋むが、崩れる程弱くはなさそうで、入口から二階の執務室まで距離のある建物の構造上、これは侵入者を察知するのに役立ちそうだ。
護衛者(ガーディアン)の視点で薔薇の館を見ていく。
階段を上りきり、そこにあるのは執務室に繋がる扉。蓉子さまが先導し、その扉を開いた。

「ごきげんよう」

「紅薔薇さま、ごきげんよう」

蓉子さまが中にいる人達に挨拶をしている。その挨拶に複数人が挨拶を返しているのが聞こえる。

「ずいぶん遅かったのね紅薔薇さま？学園長室に呼び出されたって聞いたけれど、なにかあったの？」

この声は、朝会った江利子さまの声。

「ええ、そうね…簡単に言うと、学園長から山百合会のお手伝いさんを推薦されて、その彼女を連れてきたの。来夏ちゃん入って」

蓉子さまの言葉に従い、扉をくぐる。

「失礼します」

部屋に入って、すぐ目に付いたのは…驚きの表情を浮かべる江利子さまと祥子さんの顔。

「来夏ちゃん…？」

「来夏さんっ！？」

二人が声を上げる。祥子さんは椅子から立ち上がって驚いている。さっき別れたばかりの人間が、いきなり無関係と言える薔薇の館に現れて驚いているのかもしれない。

「江利子さま、またお会いしましたね。祥子さんもさっき振り」

そう言って、私は彼女達に笑いかけた。

・・・・・

蓉子さまから、部屋にいたメンバーに説明がされた。

今日、薔薇の館に来ているのは蓉子さま含め五人…紅薔薇姉妹と白薔薇姉妹、そして黄薔薇さまである江利子さまだ。

「まぁ今の時期、お手伝いさんが来てくれるのは有り難いから…私に異論はないね」

蓉子さまの説明を聞いて、一番に口を開いたのは白薔薇さま…佐藤聖。

三人目の護衛対象のである彼女の容姿は…色素の薄い髪を肩に掛る位に切っていて、何よりの特徴は日本人離れした石膏像の様な顔だ。

「私も異論無し。むしろ大歓迎よ」

にこやかに微笑むのは江利子さまだ。

「私は…来夏さんが了承しているのであれば、反対する理由はありませんわ」

編入してきたばかりの私を気遣ってくれているのだろうか？心配そうに私を見ている祥子さんだが、反対せず受け入れてくれる。

「私も異論ありません。来夏さまよろしくお願いします」

最近、聖さまの妹になったという藤堂志摩子さんは…ふわふわの巻

き髪が良く似合う穏やかそうな子だ。

「そう、令と由乃ちゃんは来てないから聞けないけど…とりあえず問題はないわね。まあ反対意見が出ても、これは学園長からの推薦だから断る気なんて無かったけれどね」

蓉子さまはそう言って、笑顔を浮かべた。

反対があるか無いかでは、勿論無い方が心情的に楽だ。もし反対されても此処に来る事に変わりは無いけれど、嫌な思いをさせてしまうのは申し訳ないから…反対されなくて良かったと安堵の息を吐く。

私は座っていた椅子から立ち上がり、口を開いた。

「皆さん、受け入れて下さってありがとうございます。私に出来る精一杯のお手伝いをしたいと思います。慣れず失敗もあるかもしれませんが…ご指導お願い致します」

言って、私は椅子に座る皆に頭を下げたのだった。

8話（後書き）

時間を置いて読み返すと、矛盾点や穴が見えてきますねー…修正・加筆も随時していこうと思います。生温く見守ってやって下さい

9話

「それにしても…来夏ちゃんは祥子と江利子の知り合いだったのね」
蓉子さまが言っているのは、私が二人に声を掛けた事だろう。
今日は急ぐ仕事も無いそうで、現在薔薇の館では私の歓迎会が行われている。

「祥子さんはクラスメイトで…江利子さまは朝、校内を見学していた時に知り合ったんですよ」

簡単に説明する。

「ええ。でも来夏さんが薔薇の館に来るなんて、驚いたわ…学園長に呼ばれていたのも、この件だったのね？」

祥子さんは紅茶の入ったカップに手を掛けながら聞いてくる。私の前にも志摩子ちゃんが入れてくれた紅茶が置かれている。紅茶から香る良い香り…普段、紅茶を飲んでも、インスタントばかりの私には新鮮だ。

「うん。学園長が、中途半端な時期に編入した私を心配してくれたようでね」

真実はそうではないが、本当の事を話す事は出来ない。学園長と考えた設定を当たり障りなく話す。
こんな時、長く伸ばした前髪は表情を隠してくれて便利である。多少の邪魔くささはあるものの、表情の動き…目は正直に物事を語ってしまうし、視線を追われる事で狙いがバレてしまう事を防いでく

れるのだ。

紅茶に口を付ける…紅茶ってこんなに美味しい飲み物だったんだ…

「紅茶、凄く美味しい…志摩子ちゃんって紅茶入れるの上手いんだね」

さっき、自己紹介した時に志摩子ちゃんから名前で呼んで欲しいと言われたので名前で話しかける。

「ありがとうございます来夏さま」

ふわっとした微笑みを浮かべ志摩子ちゃんは返してくる。

さま付けで呼ばれる事に少しの違和感とくすぐったさを感じるが、ここリリアンでは上級生にはさま付け、同級生にはさん付けが当たり前だそうなので、どうにか堪える。

「ふふ♪それにしても、こんなに早く来夏ちゃんに再会出来て嬉しいわ」

にこにこと機嫌が良さそうにこちらを見ていた江利子さまが、そんな事を言い出す。

「へぇ…来夏ちゃんは江利子の琴線に触れたんだ？」

聖さまが、楽しそうにこちらを見ながら言う。

「琴線…ですか？」

琴線というところが気になり聖さまに聞く。

「そう、琴線。江利子って『面白いモノ』や『希少価値』の高いモノが好きなんだ。つまり、来夏ちゃんは江利子が興味惹かれる何かがあるわけだ？」

面白い物・希少価値…あの短時間で江利子さまは私に何を感じたのだろうか？

「ええ。来夏ちゃんって興味深いわ…ねえ来夏ちゃん？」

「はい？」

「話は変わるけれど、その前髪って邪魔じゃない？」

唐突に話題が私の前髪の事に変わる。

「えっ…い、いいえ問題無いですよ？」

話題の転換について行けず、少しどもってしまう私。そんな私の顔をジィっと見つめている江利子さま…まるで前髪に隠された目を透かし見る様に。

「そう…でも私は凄く気になるの」

「…はぁ？」

「それは私も気になっていたわ」

「私も～」

「そうですわね。目に前髪がかかっていると、あまり目に良くないのではないかしら？」

蓉子さま・聖さま・祥子さん…三人も気になっていたのか、そう言って私の顔を見つめてくる。ちなみに、志摩子ちゃんは私が上級生だからか何も言って来ないが、視線は彼女達と同様に私の顔だ。

「前髪を切る…のは、今無理だから分けましょう」

そう言ったのは江利子さま。何処から出したのか、既に江利子さまの手には櫛が握られている。

（私の護衛者（ガーディアン）として鍛えられた目が、その動作を捉えられなかった…だと…！？）

衝撃を受け固まる私だが、その櫛を手に近付いて来る江利子さまに気付き再起動する。

「……あのぅ？私に拒否権は…？」

ガタリと音を立て、椅子から立ち上がり一歩下がる。自分の口元が引き攣るのを感じる。

「あら？そんなの…勿論無いわよ♪」

満面の笑み…そう表していいだろう、とてもイイ笑顔で迫って来る江利子さま。私は更に後方に下がろうとした…が、いきなり後ろから抑え込まれる体。

「なあっ！？ちょっ…聖さまっ！！」

「あは♪ごめんね～？こうなった江利子からは逃げらんないよ。スッポンの如く、喰らい付いてくるからさ…諦めた方がいいよ？」

全然悪いと思って無さそうな態度で、私を押さえ込んでくる聖さま。謝る位なら、体を離して欲しい。

「というか！！聖さま離して下さいっ！！って江利子さまも近いですっ！？」

聖さまに意識が行っている内に、江利子さまはもう目の前に…近い！！

「あら？だって前髪を触るのだから、これ位近くじゃないと届かないわよ」

手に持った櫛を近づけてくる江利子さま。別に、私は前髪を分けられるのが嫌な訳じゃない。確かに目を隠し、表情を読み取られ難くするのに便利だけど、そこまで頑なに嫌がる様な事じゃ無いから。…じゃあ何がそんなに嫌なのか？それは…

「顔が近いですって！！江利子さまも聖さまもっ！！」

極端に近寄られる事…顔を近くに寄せられる事だ。

あのカリーナからキスされた事件は、しっかり私にトラウマを植え付けていたのだ。

…別に江利子さまや聖さまがキスしてくる事なんて無いと解かっていても、体は勝手に身構えてしまう。

力を込めれば、聖さまを振り払う事なんて簡単だ…長年鍛えてきたこの体は、ただの女子高生の力とは比にならないと自信がある。しかし…それを実行する事は出来ない…してはいけない。

私は逃げようとする体を精神力で押さえ込み、江利子さまの櫛が髪を梳くのを受け入れたのだった。

１０話

それは、決して長い時間ではなかったが…確実に私の中の何かをガリガリ削ったのだった。

「…はぁ～…終わった…」

聖さまが私の体を解放して、私は溜息を吐く。

「へぇ～、かなり印象が変わるね」

聖さまが私の前に回り込みしげしげと私の顔を眺め、驚いた様子である。

「本当…前髪を分けただけで、こんなにも印象が変わるのね。うん、私はこちらの方が良いと思うわ来夏ちゃん」

蓉子さまが、見た感じの感想をくれる。

「私もお姉さまと同意見だわ。ねぇ志摩子？」

「はい。とても素敵だと思います来夏さま」

それぞれが感想をくれるのを、ぐったり椅子に腰掛けて聞く。諸悪の権現…いや江利子さまは

「ふふ。思った通りだわ」

と満足そうに笑っている。

まあ…これはこれで、良く周りが見えて良い。どちらもメリット・デメリットはあるもんだし…そう思い前髪を一房摘み見る。

「確かに、少し長過ぎるかなとは思ってましたし…分ける事に異論は無かったんですけどね」

「じゃあ何が嫌で、あんなに抵抗していたの？」

私の呟きに、蓉子さまが反応して聞いてくる。

「あー…至近距離に近付かれるのが苦手なんです。ちょっとしたトラウマなんですけど、身構えちゃうんで」

苦笑しながら、蓉子さまに答える。興味深そげに、江利子さまが私を見る。

「トラウマになった理由は聞いてもいいのかしら？」

江利子さまの問いに答える前に乾いた口内を、少し冷めた紅茶で潤す。冷めても美味しい紅茶に疲れた心が少し回復した。

「大したことじゃないですが…黙秘させていただきます」

割と自分はカリーナの事を引きずってるみたいだ…別にファーストキスに夢を持っていた訳じゃないけれど、衝撃は凄かった…深い方のキスだったし…それを人に言うのは無理だ。

「ふうん…そう、ならそれは追々聞き出すわ。何だか面白そうな匂いがするもの」

「……いや、聞かれても答えませんからね？」

江利子さまの言葉に、そう返したが…私の言葉は華麗にスルーされたのだった。

・

・

・

・

それからしばらく皆でお茶を飲み、歓迎会を楽しんでその日は解散となった。

「来夏さんのお家はリリアンから遠いの？」

校門に向かう道中、祥子さんが聞いてくる。歩いているメンバーは、今日薔薇の館に来ていた五人＋私。

「ううん、近いよ。リリアンから歩いて１０分位の所だから」

歩いて１０分走って５分位の所に、アイギスが今回の任務の為に用意した拠点がある。

基本、私の任務は学園内の護衛が任務であり、学園を出た彼女達を護衛するのは他のアイギスのエージェントの任務になっている。

私の体は一つしかない、それぞれの家に帰宅する護衛対象を護る事は実質不可能だから仕方がない処置と言える。

しかし今日こうして出会った彼女達を、自分の手で守り切りたいとそう思うのだけれど…儘ならない事だ。

「両親の仕事の都合で、今は一人暮らしをしてんでね。気楽なもんだよ」

予め作っておいた設定を、スラスラと彼女達に話す私。実際は帰ってからの現状報告、何時如何なるトラブルに対応する為の訓練で大半の時間を過ごすのだ。

「いいわね～一人暮らし、私もしたいわね…父・兄達の束縛から解放…いいわ」

「ははっ、多分その父・兄達に阻止されると思うけどね～」

江利子さまが目を輝かせながら言うと、聖さまが笑いを含んだ言葉を返した。

途端、江利子さまの表情は苦虫を噛み砕いた様な顔になる。

「…夢を見るくらいいいじゃない」

「そんなに束縛が強いんですか？江利子さまの御家族は」

「母はそんな事無いのだけど、父と三人の兄の干渉が…ね」

拗ねた様に言う江利子さまに、聞くと心底ウンザリとしている感じで答えてくれた。

「溺愛されてるのよ江利子は、まあ少し度が越えているとは思うけどね」

微笑みを浮かべ、蓉子さまは言って紅茶のカップに口を付けた。

その後も江利子さまの父・兄に対する不満は止まる事を知らず、結

局そのまま下校時間間近になり下校する事になった。
私は一度『お手洗いに行く』と言い、皆と離れ通信機の電源をＯＮにする。

「こちらシールド１１、課長応答願います」

『ガガッ…こちらアイギス本部、…パパだよ～ライちゃん♪』

少しの雑音の後に、聞こえるのはか～るい調子の課長の声。

「…誰がパパですかっ！！気持ち悪い声出さないで下さい課長」

『酷いよ～ライちゃん…はっ！？これはもしや、反抗期っ？ライちゃんがグレちゃったよ～…』

そのままの調子で続ける課長に思わず、溜息を噛み殺す。

「はいはい、グレてるグレてる。…それは置いておいて、これから山百合会のメンバーが帰宅しますので、各員の配備をお願いします」

『んもうっライちゃん冷たいっ！！うむ…了解した。配備は任せたまえ』

其れまでふざけていた課長の声色が、ガラリと切り替わる。
普段はおふざけが多い課長だが、頼りになる人である。日頃の課長を見ていると、本当に昼行燈という言葉が似合う人だと思う。

『では、ご苦労だったなシールド１１。…それで♪ライちゃんの部屋、ボクがちゃんと手配しておいたからね♪期待しててね♪』

「…部屋に向かうのが怖くなってきましたよ…悪い予感しかしない」

上機嫌な課長の声に寒気を覚え、身体を震わす。

修史先輩が経験した前例を思い出し、大きな溜息を噛み殺す事も出来ず私は吐いのだった。

１０話（後書き）

ほぼ一年放置してしまいました…すみません！！
あれから、精神的にくる出来事があり、小説が書ける気力がありませんでした。
とりあえず書きかけで放置していた１０話を上げます。
続きについて、正直な所考えていた話の続きを忘れてしまって…
読んで下さった方に申し訳ないのですが、打ち切りにしようと思います。

本当に申し訳ありませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3193k/

薔薇の守護者

2011年2月26日04時34分発行